



2023年2月13日

各 位

会 社 名 黒田精工株式会社
代表者名 取締役社長 黒田 浩史
(コード番号 7726 東証 スタンダード)
問合せ先 取締役管理本部長 荻窪 康裕
(TEL 044-555-3800)

(訂正)「2022年3月期 第3四半期決算短信〔日本基準〕(連結)」の一部訂正について

2022年2月14日に発表いたしました「2022年3月期 第3四半期決算短信〔日本基準〕(連結)」の記載内容の一部に訂正がありましたのでお知らせいたします。

なお、2022年5月13日に発表いたしました「2022年3月期 決算短信〔日本基準〕(連結)」の数値データにつきましては、訂正はありません。

記

1. 【訂正理由】

2022年2月14日に提出いたしました「2022年3月期 第3四半期決算短信〔日本基準〕(連結)」の記載事項の一部に誤りがありましたので、これを訂正するものであります。

2. 【訂正箇所】

訂正箇所は_____を付して表示しております。

添付資料2ページ

1. 当四半期決算に関する定性的情報

(1) 経営成績に関する説明

(訂正前)

当第3四半期連結累計期間における世界経済は、新型コロナウイルス感染症、半導体等の部品供給不足、輸送費やエネルギー価格の高騰等の影響はあったものの、総じて持ち直しの傾向が見られました。但し、一部業種は部品不足による自動車の減産等の影響を大きく受けました。

こうした状況下、当社グループにおいては主要顧客である半導体・液晶市場に加えて自動車、家電向け金型システム商品の需要が堅調に推移し、受注高は 15,486 百万円 (前年同期比 6,513 百万円、72.6%増) と大幅な改善となりました。売上高は駆動システムの増産が寄与し、12,695 百万円 (前年同期比 3,411 百万円、36.7%増) と受注高の増加には及ばなかったものの増収結果となりました。

利益面に関しては、増収効果が寄与して、営業利益は 880 百万円（前年同期比 838 百万円増）、経常利益は 881 百万円（前年同期は経常損失 44 百万円）、親会社株主に帰属する当期純利益 561 百万円（前年同期は親会社株主に帰属する当期純損失 109 百万円）と大きく改善しました。

セグメントの業績は以下のとおりです。

なお、下記セグメントの売上高は、セグメント間の内部売上高を含めて表示しております。

○駆動システム

当セグメントでは、主要市場である半導体製造装置・各種分析関連装置分野向けを中心に高水準な受注が継続し、受注高は 8,171 百万円（前年同期比 4,740 百万円、138.1%増）と大幅に増加しました。受注高の増加には及ばないものの、生産体制増強に努めた結果売上高は 6,257 百万円（前年同期比 2,313 百万円、58.7%増）となり、営業利益は 882 百万円（前年同期は営業損失 28 百万円）と大幅な増収に伴い利益改善となりました。

○金型システム

当セグメントでは、車載用モーター向け金型の受注増加と家電用モーターコア等の受注増加により、受注高は 4,267 百万円（前年同期比 1,163 百万円、37.5%増）と増加となりました。売上高は、新規大口取引先での量産開始の遅れと東南アジアでの新型コロナウイルス感染症の再拡大の影響を受けたものの、結果として 4,030 百万円（前年同期比 919 百万円、29.6%増）、営業利益は 201 百万円（前年同期比 54 百万円、37.1%増）と増収増益となりました。

○機工・計測システム

当セグメントでは、工作機械等システム商品の緩やかな回復基調により、受注においては前年同期を上回ったものの、部品納期の長期化等の影響を受け売上は微増となりました。また収益面では、人件費をはじめとした固定費の増加及び連結子会社の業績不振の影響を受け厳しい状況が続きました。その結果、受注高は 3,054 百万円（前年同期比 611 百万円、25.0%増）、売上高は 2,416 百万円（前年同期比 180 百万円、8.1%増）、営業損失 183 百万円（前年同期は営業損失 59 百万円）となりました。

（訂正後）

当第 3 四半期連結累計期間における世界経済は、新型コロナウイルス感染症、半導体等の部品供給不足、輸送費やエネルギー価格の高騰等の影響はあったものの、総じて持ち直しの傾向が見られました。但し、一部業種は部品不足による自動車の減産等の影響を大きく受けました。

こうした状況下、当社グループにおいては主要顧客である半導体・液晶市場に加えて自動車、家電向け金型システム商品の需要が堅調に推移し、受注高は 15,129 百万円（前年同期比 6,157 百万円、68.6%増）と大幅な改善となりました。売上高は駆動システムの増産が寄与し、12,695 百万円（前年同期比 3,411 百万円、36.7%増）と受注高の増加には及ばなかったものの増収結果となりました。

利益面に関しては、増収効果が寄与して、営業利益は 880 百万円（前年同期比 838 百万円増）、経常利益は 881 百万円（前年同期は経常損失 44 百万円）、親会社株主に帰属する当期純利益 561 百万円（前年同期は親会社株主に帰属する当期純損失 109 百万円）と大きく改善しました。

セグメントの業績は以下のとおりです。

なお、下記セグメントの売上高は、セグメント間の内部売上高を含めて表示しております。

○駆動システム

当セグメントでは、主要市場である半導体製造装置・各種分析関連装置分野向けを中心に高水準な受注が継続し、受注高は 7,863 百万円（前年同期比 4,432 百万円、129.2%増）と大幅に増加しました。受注高の増加には及ばないものの、生産体制増強に努めた結果売上高は 6,257 百万円（前年同期比 2,313 百万円、58.7%増）となり、営業利益は 882 百万円（前年同期は営業損失 28 百万円）と大幅な増収に伴い利益改善となりました。

○金型システム

当セグメントでは、車載用モーター向け金型の受注増加と家電用モーターコア等の受注増加により、受注高は 4,243 百万円（前年同期比 1,138 百万円、36.7%増）と増加となりました。売上高は、新規大口取引先での量産開始の遅れと東南アジアでの新型コロナウイルス感染症の再拡大の影響を受けたものの、結果として 4,030 百万円（前年同期比 919 百万円、29.6%増）、営業利益は 201 百万円（前年同期比 54 百万円、37.1%増）と増収増益となりました。

○機工・計測システム

当セグメントでは、工作機械等システム商品の緩やかな回復基調により、受注においては前年同期を上回ったものの、部品納期の長期化等の影響を受け売上は微増となりました。また収益面では、人件費をはじめとした固定費の増加及び連結子会社の業績不振の影響を受け厳しい状況が続きました。その結果、受注高は 3,031 百万円（前年同期比 587 百万円、24.1%増）、売上高は 2,416 百万円（前年同期比 180 百万円、8.1%増）、営業損失 183 百万円（前年同期は営業損失 59 百万円）となりました。

以上